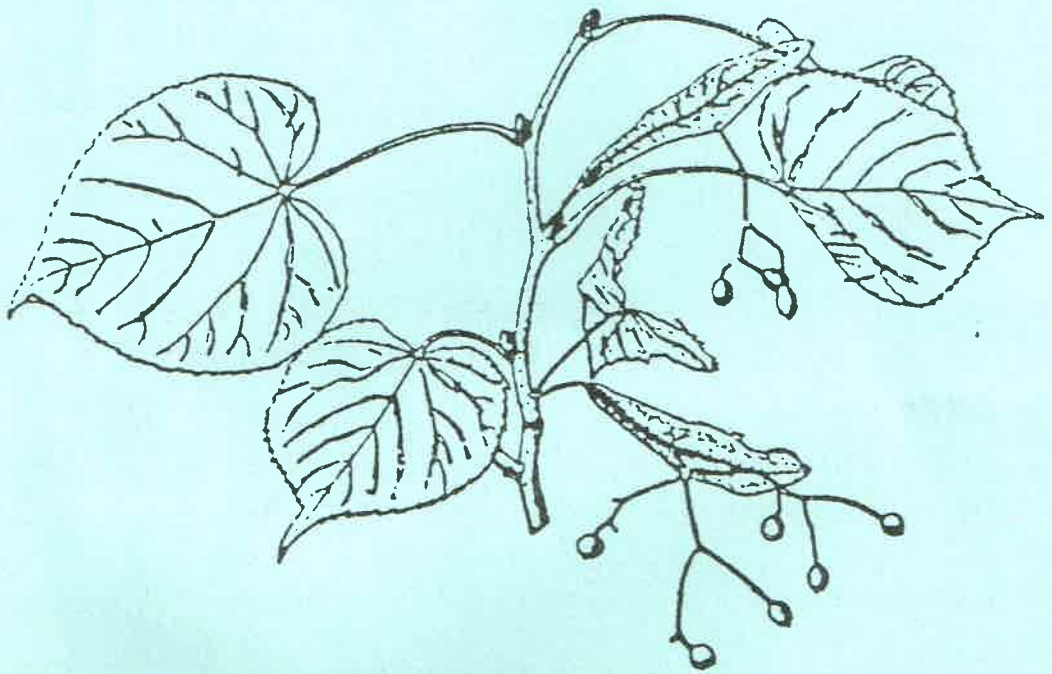


エゾマツ



Tilia japonica Simonkai

No. 34

1995. 10. 5

北海道ボランティアレンジャー協議会

目 次

1. 巻頭言 身近な自然にふれて 会長 大友 健 (1)
2. 森を読む (2)
3. 会員の声 (3)
4. 新会員紹介 (6)
5. ボランティア・レンジャー育成研修会を終えて 五十嵐 一夫 (10)
6. 言葉の解説 (14)
7. 一目をひく 吉田 政徳 (16)
8. 道端の植物あれこれ 川端 功治 (18)
9. 本の紹介 (21)
10. 観察会研修会情報 (22)
11. 編集後記 (24)

身近な自然にふれて

会長 大友 健

私達が、ボランティア、レンジャーの使命を理解しての第一歩は、「身近な自然」を、広く、浅く考え始めた歩みではなかったろうか。

北海道主催の、レンジャー養成講習にも、この項目を重点に講義をさせていただいてる私でもある。

日常的に目にしている自然、気軽にちかずき、触れ親しむことのできる自然、これらを総称して、身じかな自然と理解して、いろいろな機会に教示をいただき、多様な利活用にまで知識の深まりを覚えるのである。

人々はたしかに、いろいろな場において、自然を身じかなものとしてとらえ、雰囲気楽しく浸っている。その素晴らしさはどこにあるのだろうか。そこには、環境を構成する要因がいろいろあり、代表的なものとして、人間生活環境、野生動植物生息環境、景観を構成する環境などがあることは当然である。

時代の流れと共に発展する、社会生活環境のなかで、当然人間の生活環境の維持向上が大切であり、都市に住んでいる人びと、農村漁村で生活している人々、それぞれに自然環境の違いの中で、身じかな自然を大切に育み、楽しさを、快適さを味わいながら暮らしているのである。

札幌のような大都市には、自然林を背景とした各種公園や、市民が親しめる森づくりなどで、これらの利活用は、自然観察の森であつたり、ふれあいの森であつたり、自然探勝の森として機能をいろいろ発揮させてくれるのである。これらに対して、農村漁村では田園風景、海岸風景として自然の地形、山野を背景としたものになるであろう。

私の利用している公園には、テニスコート付近一帯が樹木で囲まれ、今ごろは木々の実が、紅色、黄色の木の葉が人々を、眺めるだけで大きく感動をさせている。四季を通じてそこには、小さな春があり、花が一杯の初夏、黄緑の木葉が、新緑そして深緑にと季節が、樹木暦であることを仲間に教え、楽しさを増やしてもらうことを、考えるこのごろである。

森を読む

「地図を読む」とか「森を読む」という言い方があります。それは「地図を見る」・「森を見る」とは違う意味があるようです。

山に出かけると、地図を広げ、コンパスで方位を確かめ、地図上の記号の意味と周囲の状況を把握し、自分の行動方向を確認します。これが「地図を読む」ということでしょう。

「森を読む」ということは、森の構成体が発している「信号」を正しく認識することから始まります。信号は正しく認識されなければ意味がありません。

森が発するいろいろな「信号」は、太古の時代、人間はほとんど本能的に読み取っていました。歴史年代に入ってから、まだその能力は大きく、そして近代になっても経験の伝承によって引き継がれてきました。

しかし今は、トレーニングなしには「森を読む」ことができなくなったと言われていました。「森を読む」トレーニングは、まず森と謙虚に対座すること、そして、森が発するさまざまな情報信号をしっかりと受けとめることだと思うのです。

6月以降の活動

- 6月 4日(日) ・野幌自然観察会 悪天候のため中止
- 6月25日(日) ・ニセコの自然観察会(前日 研修懇親会)
- 7月 9日(日) ・恵庭の自然観察会
- 8月 3日(木) ・森林公園事務所主催 8月の森の観察会 協力参加
- 8月11日(金)～13日(日) ・ボランティア・レンジャー育成研修会 新得町トムラウシ東大雪荘
(講師として3名派遣)
- 8月20日(日) ・真駒内の自然観察
- 9月 3日(日) ・野幌自然観察会
- 9月11日(月) ・10周年記念事業委員会 於：かでの2・7
- 9月18日(月) ・役員会 於：かでの2・7

会員の声

札幌市中央区 佐藤 善也

毎回の実践活動を新聞やエゾマツで知り、編集者や実践者のご苦勞の程を心から感謝しております。

私のように名ばかりの会員で、どうしても得意の部門の研修や団体活動だけの実践で申し訳なく思っております。来年より第二の人生も定年。新しい気持ちで、先輩から教えて頂き、会員らしい活動をしたいと思っております。

自然との共生において益々その重要性を知り、その本分に参加したいと存じておりますのでよろしく願います。

札幌市西区 鎌田 健治

私は手稲山ふもとの、西野に住んで17年になります。平和の滝コースをベースに登山をしていますが、残念なことに、最近の高山植物ブームでコース中の高山植物が年々減っている現状です。

以前は登山道に豊富に咲いていた、ゴゼンタチバナ、シラネアオイ、サイハイラン、ハクサンチドリ等が消えつつあります。

登山者のモラルの低下、中高年者の登山ブームが要因か、残念に思っている今日このごろです。



自然を自分のもとに

帯広市 池田 啓介

山が削られ、道路がつくられ、団地が、というように開発事業によって、私たちを取り囲む環境が変わってきています。自然環境が少なくなってきているのです。ここはと思っても、いつのまにか姿が消えているのです。

私たちのできることは、自然の姿にふれることが、自然環境を守るうえで大切なことだと思います。自然観察会を通して、土の中、小さな昆虫、草花や木、川のはたらきなど、みんなお互いにかかわりをもっていることを理解するのです。そして、私たちもその中で、いろいろなことを知り、自分たちの生活と結びついて生きていることを観察会を通して学んでいくことが大切だと思うのです。

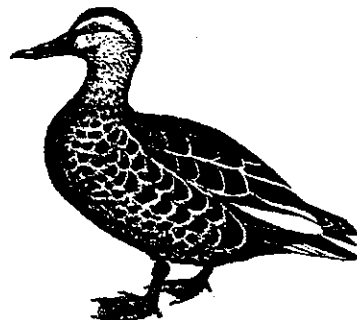
私たちボランティア・レンジャーの役目も、そのためにあると思います。多くの仲間をふやし、自然環境を大切にすることを深めていきましょう。

札幌市南区 今村 浩子

もう秋、冬支度の草木に会いにいきましょう。

今年は体の不調から、せっかくの夏を家の中で迎えてしまいました。健康のありがたさを楽しみみわかると共に、目につかなかった近々を、友人達と歩き、ボラレンで教わったことをもとに、自然や草木を好きになった、たくさんの仲間ができた事が私の大きな夏の収穫でした。

これからも、楽しみながら、息の長い活動で参加したいと思っています。よろしくご指導下さい。



帯広市 小澤 敬二

私は今、松本十郎の「石狩十勝両河紀行」を読んでいる。明治初期の内陸部の自然が記録されているからである。

来年は、松本十郎の紀行の120年記念にあたる。できればその行程をたどってみたい。残念ながら石狩岳を越えられる年齢ではない。せめて、山麓でフキの葉の小屋に泊まる体験は試みたいと思っている。

「其ノ清冽石狩川ニモ如此清水ヲ不見ナリ」と記した帯広のハラウトウは、街の中にならずかに流れている。その清流を大切にしたい。

札幌市南区 小泉 郁夫

敬老の日から3連休の週末をいつものようにニセコで過ごす。運良く15日はワールド北海道ニセコ町スタートの日、町民となって体育館前で声援。

16日は妻と初秋の神仙沼、長沼と五色温泉を歩く。6月にレンジャーの皆さんと交流会の折り通った木道が、300メートル位すっかり立派になって、まことに歩き易い。ウルシとオオカメノキの下葉が一部紅葉した道を、連休の家族連れが大勢通る。17日はニセコカントリーフェスティバルで羊蹄山麓のマラソンを走る。レンジャーの、片山健也さんが世話役で活躍していた。

丸瀬布町 佐野 亮二

丸瀬布町は、武利岳の麓「いこいの森」にミニSL「雨宮号」の走る自然の豊かな町です。自然の中で楽しみ、上手に付き合っていきたいと思い、山仲間と共に「丸瀬布探検隊」を今年6月に結成、町内のあらゆる所を探検しようと隊員一同ははりきっています。

北海道ボランティア・レンジャー協議会オホーツク支部の会員として、勉強不足を嘆きつつ支部の発展と活性化に少しでもお役に立てればと考えていますが、この地方での活動の場が少ないのが残念です。

今後共よろしくご指導をお願いします。

新会員紹介

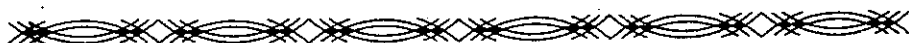
8月11日から13日 新得町トムラウシ国民宿舎東大雪荘で、平成7年度ボランティア・レンジャー育成研修会が行なわれました。

今年度も、ボランティア・レンジャー協議会から講師として、大友会長、川端副会長、五十嵐幹事が派遣されました。

育成研修会の修了者で、本会の趣旨に賛同され入会された方は下記の15名です。

新しい仲間として、観察会や研修会での活躍を期待しています。

| | | | | |
|-----|-------|-------|-------|-------|
| 札幌市 | 荒木 剛志 | 池崎 直治 | 石井満智子 | 近久 喜枝 |
| | 勝見 捷子 | 長谷川明子 | 山田 典雄 | 須田 節 |
| | 松村 勝雄 | | | |
| 函館市 | 桶田 岩男 | 北道 米男 | | |
| 江別市 | 西脇 昭夫 | 小樽市 | 若山 戒三 | |
| 江差町 | 浅野 正嗣 | 帯広市 | 米谷 敏之 | |



札幌市 山田 典雄

小雨の森を通り抜け、やっとたどりついた「霧吹の滝」。今回の研修会で、自然の素晴らしさと、中年太りの自分の体力のなさを再認識いたしました。

現在、仕事は忙しいのですが、できるかぎり行事にも参加し、自然の素晴らしさをもっと体験したいと思っています。

ぜひご指導をお願いいたします。



江差町 浅野 正嗣

みなさん、こんにちは！

私達、桧山支庁自然保護係では、桧山管内の自然と森林を歩く楽しさを紹介することを目的に、毎月登山を兼ねた観察会を開催しています。

今までに、大千軒岳、ヤンカ山、狩場山、カニカン岳、丸山で行いました。12月以降は、厚沢部町レクの森で、冬芽や動物の足跡の観察、ネイチャーゲームなどを取り入れた楽しい観察会にしようと計画しています。

一度遊びに来てください。お待ちしております。



札幌市厚別区 近久 喜枝

野幌森林公園の観察会に初めて参加したのは、ちょうど1年前の9月でした。今、その時の資料を見て思い出しています。

表紙には、ツタウルシの図がついています。あれから何回も参加して、しっかりとツタウルシも覚えました。裏表紙には、10月以降の観察会の予定が書かれていました。2年でも、3年でも毎月参加して、いろいろな事を教えていただこうと思っていましたのに、1年後には会員になってしまいました。いつの日か先輩のようになれることを夢見て頑張ります。

函館市 桶田 岩夫

今回の各講師の熱心な指導を受け、心から感謝致します。私は自然の大切さには強い関心を持っていても、自然に対する知識は皆無に等し事を改めて知らされました。

自然に対する感謝の気持ちが不足していた事と、自然の保護・保全に対する関心を一層強く感じて、人間と自然のかかわりを改めて、今私達が何をなすべきかについて

見直す必要が緊急の課題ではないかと痛切に感じさせられました。

また、これまでの林野事業のあり方を、180度変革する必要があると考えます。

小樽市 若山 戒三

この度の研修会におきましては、道自然保護課の皆様及び各講師の先生方には懇切なご指導と御配慮頂き有り難うございました。

はからずも、私のような高齢者を参加させて頂いて感謝しております。ボランティア・レンジャーのメンバーの一人として、何とか小さなことでもと目下遅まきながら札幌・小樽近郊の自然をたずねております。

今後共、ご指導下さいますようよろしくお願い致します。協議会のご発展をお祈りいたします。ありがとうございました。

江別市 西脇 昭夫

研修会には、講師の皆さんの熱心な講義を受け大変勉強になりました。また、会場の環境には申し分なく、私には印象深い三日間を過ごさせていただきました。

自然は学ぶことが余りにも多く、これからが大変と思っています。

早速入会したものの、スポーツ運動に首を突っ込んでいるため、日曜、祝日はなかなか参加出来ないことがあるかと思っていますが、よろしくお願いいたします。



札幌市豊平区 長谷川 明子

北海道ボランティア・レンジャー協議会に入会して、一ヶ月が過ぎました。今はただ仕事の合間に体を鍛えて、なんとかついて行けるようにと日々頑張っております。

この頃は、中央警察署の敷地内の大きな木や街路樹などにも目が止まるようになってきて、ますます自然の大切さとありがたさを感じています。そして、植物や動物たちは生命力は強いのですが、それが減びるので、本当に切なく思う今日この頃です。

そう言いながら、どっぷりと都会の生活に浸っている自分に矛盾を感じたりしていますが……。

札幌市厚別区 石井 満智子

初めまして。皆様の仲間に加えて頂けることになり、とても嬉しく思っています。

時々、夫と本を片手に近くの公園を歩きます。草や木や花の名前を一度に覚えられずに、何度も何度も同じ箇所を開いて苦笑しています。

こんなに知らなかったことに、改めて感心したり、驚いたりのごごろです。

確かな観察眼と、心から自然を楽しむ、そんな時間を共有できたら素敵ですね。

会員になられた皆さんには、北海道ボランティア・レンジャー協議会の会員の証しとして、観察会・研修会に使用する、腕章を送りました。

会員の中で、腕章が手元にない方は、事務局までご連絡ください。お送りいたします。

平成7年度 ボランティア・レンジャー育成研修会を終えて

研修部 五十嵐 一 夫

8月11日から13日の3日間、新得町のトムラウシ温泉で第16回のボランティア・レンジャー育成研修会が開催されました。昨年のお美深に続き今年も大友会長川端副会長と私の3人で「自然解説の方法と技術」について講師として参加してきました。その時の様子を皆様にお知らせします。

新得の町はずれから約50km、屈足の集落をぬけ十勝ダム沿いにトムラウシ温泉に続く道は温泉の数キロ手前まで立派な舗装道路で何か変な感じがします。実はこの道路、大雪縦貫道の予定ルートの一部なのです。自然保護団体の猛反対にあって計画はいまのところ中止されたままですが、この道路の整備状況を見ると、きな臭い感じがします。オプタテシケ山のわきをトンネルでぬけて白金温泉と結ぶ計画だそうです。私達がトムラウシ温泉に着いたときには、数日前にトムラウシ川で起きた遭難事件の捜索隊がまだフロント横の大広間に陣取っており物々しい雰囲気でした。久しぶりに訪れた東大雪荘は地上4階建てのロッジ風の建物に生まれ変わっていて昔の山奥の一軒宿の風情は全くなく広大な駐車場も本州ナンバーの車が半分ほどあって驚いてしまいました。

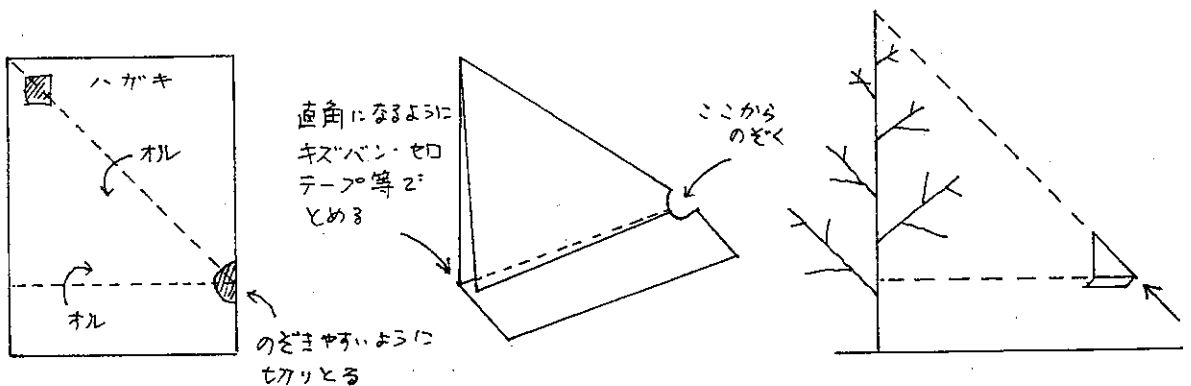
私達の出番は翌日ですから早速フィールドの下見に出かけました。遊歩道や散策路はなく、トムラウシ山への登山道と林道を使ってあとは温泉前の広場でやるしかなさそうです。

初日の夕食は懇親を兼ねて野外パーティーです。講師の面々は昨年と同じ顔ぶれが多く「やあ、お久しぶり」と和気あいあいの感じです。また受講者の中に我々の観察会にいつも参加されていたいわゆる常連さんがいて、自然解説員になるべく今回受講されていることをとても嬉しく思いました。

翌日は朝早くから探鳥会です。ところが鳥が全然いません。昨日は沢山鳴いていたのですがカワガラスの潜水を見たことが唯一の収穫になるありさまで、最後の鳥あわせでは片手で数えて終わりという始末。こんなに出現数の少ない探鳥会は滅多にありませんから、皆さん大変貴重な経験ですよという迷解説で締めくくりとなりました。朝食のあと、午前中は環境科学センターの村野部長の野生動物についての講義と、大友会長の室内講義です。その間に川端副会長と私はもう一度下見

です。午後からいよいよフィールドに出て実習です。まず森のスケッチをして、森を見る目を養います。絵を見ただけで何の木を描いたのか判るようになれば立派なものです。私もすこし描くことを勉強しなければと、講師自ら反省してしまう有意義な実習内容なのです。

次は、川端式簡易樹高測定器を使った樹高測定。広場に生えているヤチダモに主役になってもらいました。高すぎず低すぎずちょうど良い高さです。3人ずつのグループ分けをして、それぞれ木の高さを考えてもらいます。最初に見ただけのあてずっぽうで木の高さを言ってもらいます。それから筆記用具などを使って目測します。段々とヤチダモ氏（ヤチダモ嬢？）の高さが分かってきます。いよいよ川端式簡易樹高測定器の出番です。できるだけ水平になるようにハガキを持って45度の角度で木のてっぺんが見えるところまで下がります。あとは木までの距離を歩測して地面から目までの高さを加えると樹高が分かります。各グループの答えを集めると14.5mから20.5mまで幅がありました。一番多かった答えは16.0m。多分、測高器を使っても同じだと思います。以外と精度が高いのです。



川端式簡易樹高測定器

両手にそれぞれ別の木の葉を拾ってきて、その違いや特徴を考えてもらったり聴診器を使って木の音を聞いてみます。残念ながら季節が悪いのでほとんど音は聞こえませんでした。

実習の後半は3つのグループに別れて実際の観察会の手順に沿ってミニ観察会です。時間は約1時間。2日目の午後で受講者も疲れのピークだと思われるので少し終わりの時間を早めることにします。自然観察会の始まりは挨拶からです。

それからその日の見どころ、観察に入る前の注意事項、例えばタバコ、ガム、アメは観察会の間は我慢してもらうなどを話します。服装の注意も忘れてはいけません。できるだけ素肌を出さないこと、虫除けスプレーは夏場は必携、黒っぽい服装を避けること。特にツタウルシとスズメバチの注意は絶対に必要です。大友会長と川端副会長はどうやら林道のほうへ入っていったようです。私はまだ広場に残って昨年ちょっとした思いつきでやってみたところ大変好評だった携帯品の御披露目をすることにします。愛用のランセルのポロショルダーバッグの中に入っているものを見せます。樹、草、鳥の図鑑各1冊、ルーペ、巻尺、虫除けスプレー、子供たちや無関心な人達を引きずり込むための小道具、たとえばフィルムケースに入れた木の実、セミの抜け殻野幌森林公園の土の中から出てくる貝の化石（ダイシャカニシキガイ、エソワスレガイ）いろいろな木の木質や木目のわかる木片のサンプルフィトンチッドの成分に含まれている香料、などなど。

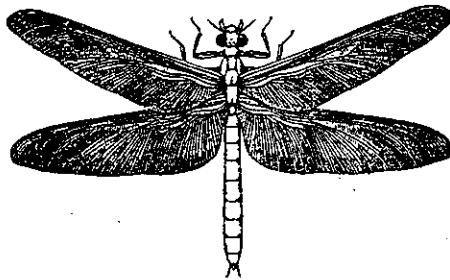
観察会で自然解説をする上での大事な点を次々と羅列していきます。目で見るだけでなく手で触れること、匂いを嗅ぐことも大切。葉や花は可能なかぎり採らずに説明すること、地面に落ちている物にも気を配ること、解説員一人でカバーできる人数はせいぜい7、8人だということ、分からないことは分からないとはっきり伝え次回までの宿題として決して適当なウソをつかないこと、下見を必ずすること。時間があっというまに過ぎていきます。私のグループは林道まで入っていけそうもありません。これは何の木、この花の名前は何々とすぐ答えを出してしまうのはよくありません。参加者に考えてもらうことが大切です。約1時間、大声の出しばなしで久しぶりにチョット疲れてきました。以外と体力使います。最後の締めくくりでその日印象に残ったことなど参加者の感想を聞いて、次回の観察会があればそのコマーシャルをすることなどを説明して少し早目に終わることにしました。

特に変わった植物があるわけではありませんでしたが、広場の入口付近に4本まとまったコブニレの大木が印象的でした。直径80cm、樹高20mほどでこれだけ大きなコブニレは初めて見ました。

私達の役目はこれで終わりましたが受講者の皆さんはまだ室内講義があります。彼らには申し訳ないけれどひと足お先に温泉につかって冷たいビールをゴクン。やめられまへん。

最終日の午前中は森の観察会です。バスで展望台まで上り、木の説明を聞きながら霧吹きのかげまで歩いて下ります。以前に来たときに比べると道はかなり整備されていましたが、それでも山登りの感覚で標高差200mほどを一気に下ります。おまけに雨にも降られてしまい、帰りの登りのことを考えると気分が暗くなります。それでも霧吹きのかげに着いて、講師の林業試験場の沢さんが「こんなところまで来るんじゃないかと思う人？」と聞いたときに手を上げた人はいませんでした。

全ての講義、実習も無事に終わり閉講式のあと昼食をとって解散です。食事の最中に大友会長がボランティア・レンジャー協会への入会を呼びかけたところその場で13名、後日2名で15名の新しい仲間が増えました。大役を無事に果たし帰路につきました。家に帰って風呂につかり冷たいビールをゴクン、ゴクン。やめられまへん、本当に。



会員名簿作成中

平成7年度の会員名簿の作成の作業を進めています。住所や電話番号等の変更がありましたら、下記へご連絡ください。

次号「エゾマツ」35号に合わせてお送りできるよう努力していますので、もうしばらくお待ちください。

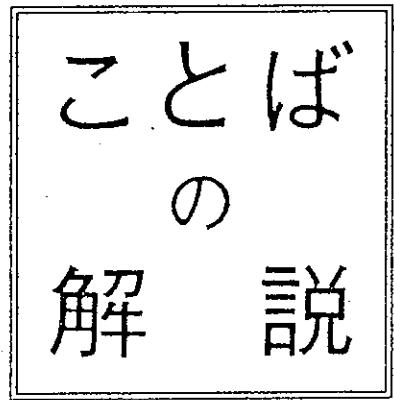
会員名簿作成連絡先

〒061-22 札幌市南区藤野4条7丁目277-74

総務部長 佐藤 健一 Ⅸ 011-592-4222

秋の大四辺形

(ペガサス座)



10月の夜10時頃、11月なら8時頃、頭上高く、四つの星が大きな四辺形を形づくって輝いているのがわかります。四辺形を形づくるのは、二つの二等星と一個の三等星です。それほど明るくないのに、四辺形の中の星がほとんど見えないせいかとても目立ちます。これがペガサス座の目印です。この四辺形は「ペガサスの大四辺形」とか「秋の大四辺形」と呼ばれ、秋の夜空ではひととき目立っています。

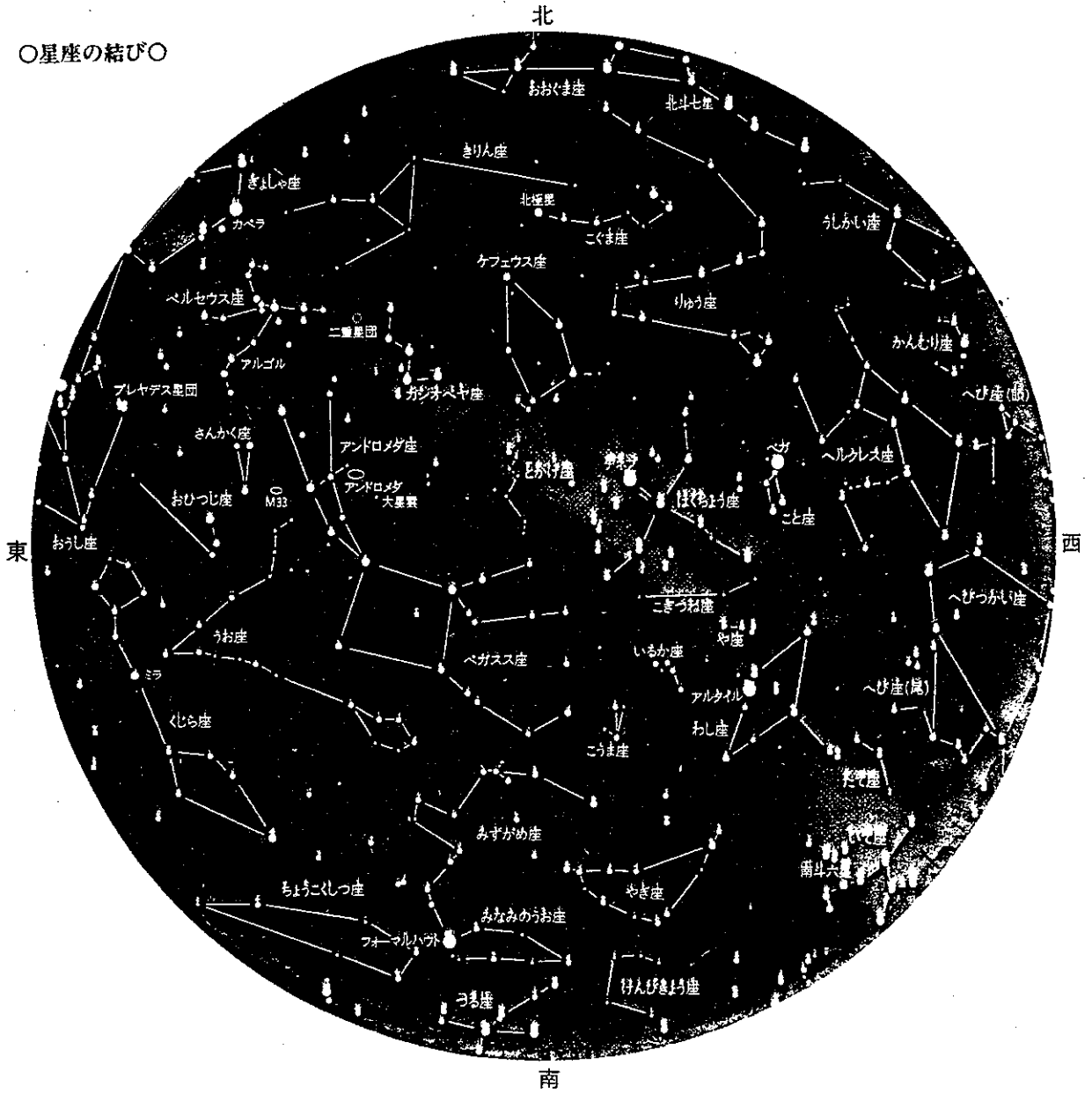
ペガサスは羽をもち天空を飛ぶ馬の姿をした動物です。四辺形はこの馬の胴の前半分にあたり、星座では体の半分しかすがたを見せていません。

ギリシャ神話では、ペルセウスとベレロフォンという二人の王子に仕え、幾多の冒険に加わった、空を飛ぶ天馬ペガサスの姿だと言われています。上半分しかないのはペガサスがあまりにも速くそらを飛ぶため、後ろ半分がついていけずにちぎれてしまったためと説明されています。

この天馬ペガサスの誕生をギリシャ神話は次のように綴っています。戦士ペルセウスが、蛇の髪をもつゴルゴン姉妹の一人、その顔を見る者をすべて石に変えてしまう恐ろしいメドゥーサの首を切り取ったとき、メドゥーサの体から湧き出したのが、天の馬ペガサスだと言うのです。そのため、ペガサスはギリシャ語の「泉」とか「水」を意味する言葉が語源になっています。また、ペガサスはリキヤ王が国を荒らす火を吹く怪獣キメラを退治するために遣わしたベレロフォンの乗馬でした。ペガサスに乗り天を駆けたベレロフォンは、上空から矢と槍を放ってキメラを襲い退治しました。

秋の夜、天頂近くのペガサス座を探し、ギリシャ神話に浸るのも楽しいことだと思います。

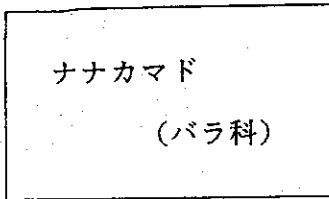
○星座の結び○



人目をひく

旭川市 吉田 政徳

校庭の樹木の名札が朽ちはて、なかには失われているのもあったので、この際、新しく付け替えることにしました。これまでの名札は白いペンキを塗った四角い板に黒字で下のように書いたものばかりでした。



これでは、ちょっと、つまらないような気がするのです。子どもたちに関心をもてる樹木の名札を考えなければならないと思いました。

〔1年目〕 名札は四角いものでなく、樹木の葉や花や実を形どって、それに合った色を塗りました。説明は、樹木の特徴、名前のいわれ、用途などを詳しく書き、また、樹木名を平仮名にして柔らかみをもたせました。一例—

えぞしゃくなげ
(つつじのなかま)

しゃくなげの名前は枝が曲がって
っていて、部分が一尺にもならない
ので、しゃくなし、これがなまって
しゃくなげ……云々

これなら、子どもたちも関心をもってくれるだろうと期待をしたのですが、いま一つ反応がありませんでした。せめてもタクシーの運転手さんが客迎えで待っている間読んでくれたのでしょうか、「しゃくなしがなまって、しゃくなげとはねえ」と感心しておられたのが印象的でした。

詳しく書いても読む気が起こらないなら、あまり意味がありません。一目見たとき何が書いてあるのか強い関心や興味が起こる動機づけを考えなければなりません。

〔2年目〕 そこで、花の特徴や身近な動物の顔や形を図案化した名札を作ることにしました。色彩もできるだけ目立つ色にしました。説明は、二行ないし四行程度。

触れて見ようという気持ちができるような表現にも配慮したり、ときには会話調にしたり、疑人化した動物に登場を願ったりして、とにかく人目をひくようにという素朴な発想から始めたのです。

子どもたちの反応を想像しながら糸のこ機械にベニヤ板を押し当てる楽しい毎日が続きました。

—例—

えぞしゃくなげ

(つつじのなかま)

しゃくなしが、しゃくなげになった。

それほんと？

もう一つの木には、

—例—

えぞしゃくなげ

(つつじのなかま)

まっすぐなみきが一尺（やく30cm）に

もならないので、しゃくなし、いつのま

にかしゃくなげになったというわけ。

花の部分は薄桃色、葉の部分には緑、文字は花の部分にかぶせるように。

名札を取り付けて間もなく、登校の際、立ち止まって読んでいる子どもが目につくようになりました。草木に触れたことのない子が、「先生、くだもののおいがするよ」と得意気になって、ニオイヒバの葉を担任に見せにきたという話題も聞かれるようになりました。

近頃の子どもは自然に関心がない、理科離れとか言われています。なんとか関心、興味、意欲を育てるチャンスをつかもうと始めた一歩に、かすかな手応えを感じているこの頃です。



道端の植物あれこれ

札幌市 川端 功治

《 踏み跡群落のトップスター オオバコ 》

漢名で車前草。その生態を言い得て絶妙。さすが文字の国、中国ならではの呼び名である。凸凹道をゴトゴトと荷馬車を駆る農夫の姿が浮かんでくるが、手綱を操る農民の目に映るのは、曲りくねった農道の両側に並んで繁るオオバコのみちであろう。日本の道はすっかり舗装されて、脇道にでも逸れなければ凸凹道が見られなくなったが、どこまで行っても車の前に現れるから車前草。中国の人達は、踏まれても、蹴られても、果ては折られ砕かれても再生するオオバコの逞しさとエネルギーに驚嘆し、その神秘性を信じて漢方薬として開発したものが日本に伝えられた。

生態学では、踏み跡もしくは踏み付け群落と呼ばれ、他にイグサ類などと混成するが、やはり立役者はオオバコであろう。

種類としては、3属270種、日本の野生種は4種、外来種は数種、北海道は、オオバコ、エゾオオバコ、ヘラオオバコ、ヤグラオオバコ（奇形種）、テリハオオバコ（トウオオオバコの海岸種）。薬草の効用としては消炎、利尿、咳止め、痰切り、歯痛止め。山菜としては救荒食物扱い。

室井ひろし博士は、その著書、植物観察でオオバコを「人里植物」として位置付けして次のように礼賛している。

「オオバコは日本人の足です。オオバコの生えているところは、どんな山の中でも草鞋や草履をはいて歩いた道と言えます。山で迷っても、オオバコさえ生えていれば、もう人家が見つかったも同じだと安心できるほどです。オオバコの葉はテンプラの材料として年中食べられます。もちもちとした味は他のものではとうてい味わえないおいしさです。

オオバコは表皮細胞が硬いので、テンプラをするときに、油の中で葉が膨れてパンと破れ、高温の油が飛び散るので、揚げる時は、片揚げといって、葉の裏面だけにくろもをつけると、鮮やかな緑色が食欲をそそります。」

ところで、踏み付けられても容易に再起する仕組みはどのように成っているのだろうか。

まず、オオバコを引き抜いてみると、葉と根毛と花茎を出している固まりがある。この恐ろしく硬いボール状のものを縦に切断して見ると、葉の出方からボール状の茎と見なさ

れる。人の履物は勿論のこと、トラック等のタイヤで踏みにじられても、土の中にめり込むだけで、再起は充分可能である。

子供の頃、オオバコの葉を筆りあっても、筋がのびて千切れないのに驚いたことを覚えている。破損に対応する維管束のすばらしい柔軟性能であろう。それから、誰しも遊んだ花茎を絡めての綱引きごっこは記憶にあるはずだ。2人抜き、3抜きまで勝ち残るために、より強い茎を探すのに夢中になった記憶が懐かしいが、綱引き遊びに耐える程強い茎なのである。

道路は人や動物が通る。その布地や毛に種子の運搬を託する植物は多いが、オオバコの種子は完熟すると、粘着性がでる。自動車等の鉄板やプラスチックにも運んで貰えるという贅沢さ加減である。

花穂は両性花をつけ、雌芯の先熟花で、いち早く受精を終え、自家受粉を避ける賢さも備えている。強いものが生き残るのは当たり前、と言えば当たり前のことであるが、その巧妙な仕組みには、ただ、ただ敬服のほかはない。

《 タンポポの謎 》

タンポポは余りにも身近な存在であるため、その生態を調べようなどとは考えもしなかったが、庭の草筆りを始めると、いの一歩に手こずり、改めてその遅しさに目をみはる。

直根が長いうえに、根張りが強く雑草の内でも最たる難物の一つであろう。

NHK放映「植物の不思議旅」の中でセイヨウタンポポを取り上げて、その生い立ちと問題点を詳述している中で、幾つか興味を引くものがあった。そもそもセイヨウタンポポが日本に第一歩を印したのは北海道であった。料理用野菜としてお目見えしたものが野外に逸出して、急速に道内の路傍や野原に勢力を広めたので、明治37年に時の高名な植物学者牧野博士は、セイヨウタンポポの強靱な精力に驚嘆しエゾタンポポやカントウタンポポ、カンサイタンポポ等の在来種はいずれ、追い払われることになるだろうと予言したが、事実はその通りになってしまった。

それにしてもどのような歴史が彼等をして、この様な遅しい征服者に仕立て上げてしまったのか。その問いに研究者田中肇氏は次のように答えている。

先住植物が繁茂する土地に、新しく後進植物が侵入しようとするのは、容易なことではない。必然的に荒らされた土地で他の植物が住んでいないような所が優先的に選ばれる。

掘り返されたような所、とんでもなく離れた飛び地で、昆虫の目が届かず交配の機会を失う恐れのある所、コンクリートの隙間等で廻りが閉鎖され、風媒で繁殖できないような所、等が新人の侵入者に残された土地である。この為に長い年月を掛けてとんでもない繁殖の方法を身に付けたのである。自殖型繁殖の方法即ち単為生殖である。受粉や受精をしなくても、セイヨウタンポポの子房の中では細胞分裂がどしどし進んで、発芽力があり完全に次世代となりうる種が出来上がり、やがてパラシュートのような冠毛を開いて旅立って行く。この場合親と全く同じ遺伝子を持った種ができて生命を引き継いで行く。

言葉を換えて言えば、さながら印刷機械が洪水の如く印刷物を刷り出すに似ている。雌しべは花粉を受けないで完全な種子を作る。仮に花粉を受けてもこの花粉自体に能力が無いのである。エゾタンポポの花粉は粒が揃っているが、セイヨウタンポポは不揃いで3倍体であるから繁殖する能力が無いのである。

子供の頃から種が出来る仕組みを学校で習った記憶があるが、確か先生が生徒にそれぞれタンポポを持たせ、バラバラにして説明をされたと思うが、その内容が思い出せない。

そのタンポポが在来種か西洋種かで説明を変えなければならないとすると、学校の先生方に余分な手間が増えたことになるし、低学年向きの繁殖マニュアル作りが大変であろう。

ところで子供どころか大人の私でも納得出来ないことが多い。自殖型の花が虫媒花と思わせるような華やかな花卉をつけているのはどうしたことだろうか。もしもこれは単なる虫媒花時代の名残りに過ぎないとすれば、気にすることも無いのであるが、仮にこれが次の世代に飛躍しようとする準備の段取りとすれば気は許せない。現在のところ高山性のタカネタンポポ、オダサムタンポポ、フタマタンポポ、等が安泰なので、これを攻撃しようとする植物があれば、高山に適応出来る遺伝子を持たなければならないだろう。氷河時代の遺存種の中へ好んで侵入する訳は理解しにくいことである。

綿雲の一つ二つ、ぼっかりと浮かんだ夏空の果てまで、セイヨウタンポポに埋めつくされた、黄一色の野原に寝ころんで、このタンポポが何を企んでいるのかを推理するのは楽しい。もしも5年や10年の短いスパンで考えるなら、それは妄想の誘いを免れえまい。

すくなくとも、千年以上の単位で考えるなら、空想という立派な科学として取り扱ってほしいものである。



本の紹介

BOOK

共同通信社 編

山を歩けば

共同通信社 1994.11.16 発行

定 価 1600円

「山を歩けば」との題名からイメージすると、山登りに関する本の感がしますが、内容は異なります。日本の国土の三分の二は山地です。山を抱えているありがたさを考えてみようとの意図で、さまざまなルポルタージュでまとめられた本です。そして本著は7つの章から成っています。

1章 変わる自然 2章 荒れる山 3章 山に生きる 4章 山を守る
5章 山の伝統 6章 歴史を語る 7章 山は友達

1章、「変わる自然」の中に、十勝岳山麓の「山にいる生きている化石」(ナキウサギ)が紹介されています。

太古には栄えたが、いまはわずかに生き残っている生物を「生きている化石」(レリック)と呼びますが、大雪山系の高山帯を中心に生息する「ナキウサギ」が代表例です。1928年、常呂郡置戸町で植林を荒らす害獣が捕獲されました。地元で「ゴンネズミ」と呼んでいた小動物、それが初めて確認されたナキウサギだったのです。

その後ナキウサギの研究は進んでいますが地下の生活は不明な点も多いそうです。このように全国各地の、山、森林、溪谷、山地と人間のかかわり、伝説、伝統、風俗を各5～6ページの単位でまとめてあります。

本著のあとがきに、編者は「おじいさんは山にしば刈りに……の昔話の時代から、たきぎや山菜取り、遊び場、ハイキングにと私たち日本人の生活と密接に絡み合ってきた山々は、丘陵地も村落の近くの山里も、森林も溪谷も奥山も、いま荒れている。

マツクイムシや酸性雨被害、酸性霧被害に原風景が消えている。国有林は山林労働者の高齢化で荒れ放題だ」となげいています。

観察会研修会 情報

10月以降のボランティア・レンジャー協議会主催の自然観察会

- ◎「野幌の自然観察会」 野幌森林公園
平成7年11月19日(日) 10:00~12:00 下見 11月12日(日)
集合場所 野幌森林公園内北海道開拓記念館前
- ◎「滝野の森を歩く 自然観察会」 滝野すずらん丘陵公園
平成8年2月25日(日) 10:00~12:00 下見 2月18日(日)
集合場所 札幌市南区 滝野すずらん丘陵公園溪流口駐車場
- 【オホーツク支部主催】
- ◎「自然観察勉強会」 平成7年10月8日(日) 9:30~11:30
集合場所 網走郡津別町字上里 ホテル フォレスター
- ◎「自然観察勉強会」 平成8年3月17日(日)
集合場所 北見市郊外(河川敷周辺)
(支部主催活動については、支部長 高橋義治 TEL 0157-61-8254 にお問い合わせ下さい)

10月以降のボランティア・レンジャー協議会が協力する自然観察会

(野幌森林公園事務所主催)

- ◎「秋の森の観察会」 平成7年10月22日(日) 9:30~14:00 下見 10月15日
集合場所 野幌森林公園大沢口
- ◎「12月の森の観察会」 平成7年12月7日(木) 10:00~12:00 下見 12月5日
集合場所 野幌森林公園内北海道開拓記念館前
- ◎「1月の森の観察会」 平成8年1月11日(木) 10:00~12:00 下見 1月9日
集合場所 野幌森林公園内北海道開拓記念館前
- ◎「冬の森の観察会」 平成8年3月3日(日) 9:30~14:00 下見 3月2日
集合場所・観察コースについては、2ヶ月前までにお知らせします。

「御案内」

野幌森林公園 秋の森の観察会のお知らせ

10月も下旬に近づいた森は、木々の紅葉や黄葉が美しく、北からの渡り鳥達が、忙しそうに餌を探しています。
深まりゆく秋の森を歩いて、自然の素晴らしさを確かめて見ませんか。

<主催>北海道野幌森林公園事務所

<協力>北海道ボランティア・レンジャー協議会

* 日時

平成7年10月22日(日)

午前9時30分から午後2時まで

* 集合場所・集合時間

野幌森林公園大沢口に、午前9時30分までに集合してください。

* 観察コース

大沢口(集合) → 大沢コース → 大沢園地(昼食) → カツラコース →

大沢口(解散) (約3.6Kmのコースです。)

* 案内者

北海道ボランティア・レンジャー協議会会員

野幌森林公園事務所職員

* その他

○ この森林観察会はどなたでも自由に参加できます。参加費は無料です。事前の申込の必要はありません。

○ 昼食、雨具をご用意ください。(小雨決行です。大雨など悪天候の場合は中止します。)

○ 筆記具、双眼鏡やルーペなどの観察用具、植物や野鳥の図鑑などをお持ちになると便利です。

<交通機関の御案内>

* 新札幌駅前からJRバス「文京台」行きに乗車、「文京台南町」下車、徒歩約7分。

* 新札幌駅前から夕鉄バス「文京通西」行きに乗車、「大沢公園入口」下車、徒歩約5分。

* 駐車場は収容台数が少なく混雑が予想されますので、自家用車の利用はなるべく控えてください。

お問い合わせ先

北海道野幌森林公園事務所(公園管理部公園利用課)

〒004 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2 北海道開拓記念館内

電話 011-898-0455

編集後記

夏のなごりが残る9月3日(日)、大会主催の「野幌自然観察の集い」に、一般参加者と会員が多数あつまりました。

ナナカマド・ハウノキ・エゾニワトコの赤い実、オオアワダチソウ・サラシナショウマ・エゾヤマハギの花などが秋の気配を漂わせていました。

この34号が皆様の手が届くころは、秋まっさかり、野山が赤や黄に色どられていることでしょう。

毎年繰り返されている自然の営みの中に、身をまかせることの幸せを感じながら、34号を編集しました。皆様のご批評をお願いします。

北海道ボランティア・レンジャー協議会

会報誌「エゾマツ」34号 1995.10.5 発行

発行責任者 大友 健

(表紙題字 岡田 元北海道生活環境部長)

表紙絵

シナノキ

シナノキ科。日本特産の落葉高木。現在利用されている大部分は北海道産。

樹皮は黒ずんだ茶色で、縦に裂ける。葉は互生で、2 cm から4 cmの葉柄がある。形は円状心臟形。葉のつけ根から花をつけた長い柄を出し、淡黄色の花を開く。材質は強くないが、曲げても容易におれない。